

## アヘンの社会学 ——『エドウィン・ドルードの謎』をめぐって——

牧 嶋 秀 之

未完となったディケンズの最後の作品『エドウィン・ドルードの謎』(*The Mystery of Edwin Drood*, 1870, 以下『ドルード』と略記)は、印象的なアヘン窟の描写で始まる。主人公ジャスパーは他のインド人、中国人らの客とともに、アヘンの吸煙にふける。

男(ジャスパー)はよろよろとベッドから起き上がると、パイプを暖炉台の上に置き、ほろほろのカーテンを開けて、三人のお仲間を不愉快そうに眺める。アヘンを吸って寝込んでしまった例の女は、奇妙なほど中国人に似ているのに気がついた。中国人の頬、目、こめかみの形や顔色などが、そっくりそのまま女にのり移っている。仰向けに寝転がっているその中国人は手足をふるわせて、自国の神様か、あるいは悪魔かもしれぬが、それと大格闘の最中で、恐ろしい唸り声をあげている。インド人水夫は笑いながら、口からよだれを垂らしている。アヘン窟の女主人は身動きもしない。(かっこ内は筆者)<sup>1</sup>

ジャスパーがアヘン中毒であることは彼の人物造形の一部をなして、彼の一種薄気味の悪さを強める効果を持っている。

この冒頭の部分だけでなく、ジャスパーのアヘン吸煙の場面はいくつもあり、彼が自宅でもアヘンを用いていることが明らかにされる。甥にあた

るエドウィン・ドルードは、ジャスパーの家に来て話をしている最中にジャスパーの様子がおかしいことに気づく。心配するエドウィンにジャスパーは言う。

「わたしは前からアヘンを飲んでいるんだよ。時々どうにも我慢できなくなる痛み——激痛——を消すためにね。アヘンの効果が暗い影か雲のようにわたしの上を襲って、ずっと通り過ぎるのだ。きみが今見ているのは、その通っているところなのさ。すぐに消えてしまうさ。むこうを向いていておくれ。その方が早く消えるからね」<sup>2</sup>

ここで驚くのは、ジャスパーがアヘンの常用を隠そうとしていないことである。現在の日本で大麻を吸引するのはまったく異なるのである。

当時、アヘンの使用はとくに恥ずべきことではなかったのであろうか。そもそも合法的な行為だったのか。使用していたのは主にどの階級だったのか。入手は容易だったのか。高価なものではなかったのか。このような問題意識を持ちつつ、『ドルード』のジャスパーをきっかけにして、19世紀イギリスにおけるアヘンの表象について考えてみたい。

アヘンといえばすぐにアヘン戦争（1840～42）を連想するが、イギリス本国におけるアヘン使用と、イギリスによる中国へのアヘン輸出とは特に関係はない。イギリス国内でアヘン中毒が問題になったためにイギリス国内では禁止して、余ったアヘンを中国に売りつけたというようなことではない。イギリスは中国から茶や香料を輸入し、その代金を銀で支払った。そしてインド産のアヘンを中国に売って、その銀を買い戻していた。よく知られているように、イギリス、その植民地インド、そして中国との間に三角貿易が成立していたわけである。イギリス国内で使用されたアヘンはトルコ産のものであり、それはインド産のものより質がすぐれていた

のだという。イギリス国内に流通していたアヘンはすべて輸入品であり、18世紀から19世紀にかけて国内でけしの栽培が試みられたが、コストがかかりすぎるために取りやめになった。

ジャスパーが激痛を消すためにアヘンを用いていたことでもわかるとおり、もともとアヘンは薬剤として用いられていた。ヨーロッパではギリシア・ローマの時代からアヘンの存在が知られていたが、医薬品として確立されたのは16世紀であった。そして17世紀にイギリス人医師トマス・シドナムが服用しやすいアヘンチンキを初めて調合した。アヘンチンキとは、アヘンをアルコールと蒸留水に溶かしたものである。18世紀にはアヘン入り強壯剤なども作られるようになった。しかしこの時期までのアヘンの使用量は、イギリス全体としては大きなものではなかった。

19世紀になると、さまざまなアヘン入り商品が開発され、誰もが容易に入手できるものとなった。それらは薬屋だけでなく、食料雑貨店、靴屋、仕立屋、パン屋などにも置かれ、パブは酔い覚ましとしてアヘン剤を備えるのが普通だった。こうしてアヘンはあらゆる階級の人々の日常生活の中に入り込んでいった。

19世紀になってアヘンが人々の間に広がっていったようすは、ド・クインシー著『阿片常用者の告白』(*Confessions of an English Opium-Eater*, 1821. 以下『告白』と略記)にも描かれている。

数年前、マンチェスターを通り過ぎた折、何人かの綿織物製造業者から聞いた話によれば、職工たちが急速に阿片常用の習慣に染まっていたとのことであった。その甚だしさときたら、土曜の午後には何処の薬種商の帳場も、晩の常連の注文に備えて並べられる1グレーン、2グレーン、3グレーンの丸薬で所狭しの有様だという。このような習慣が生まれた直接の原因は、低賃金にあった。当時の職工たちにはそ

のために麦酒や火酒に耽溺する余裕はなかったのである。<sup>3</sup>

この記述でわかるのは、アヘン剤がきわめて安価であり、労働の疲れを癒す格好の手段であったということである。

それだけではない。19世紀イギリスではアヘンは万能薬のような用いられ方をしていた。アヘンは鎮痛剤、鎮咳剤、止瀉剤として特に知られていたが、さらに結核、熱病、百日咳、コレラといった伝染病や各種神経症の治療薬としても用いられた。つまりアヘンは家庭用の薬品として不可欠の意味を持っていたのである。18、19世紀には、一般の民衆が内科医にかかることはまずなかった。診察料が高額であったからである。19世紀末になると診察料は安くなったが、それでも5シリング程度で、週給20シリングほどであった労働者が医者にかかることはめったになく、売薬による治療に頼っていた。

ただ、アヘンを摂取しているとしだいに中毒となり、からだに害となることは知られていた。同じ量では前と同じ効果を得ることができず、次第に摂取量と回数が増えていく。摂取を止めると激しい禁断症状に見舞われる。今日の薬物中毒と同様である。それでイギリスでは19世紀半ばになるとアヘン使用に対する反対運動が起こってきた。

反対運動を主導していた団体はいくつかあったが、そのひとつは禁酒・節酒運動と連動したものであった。彼らは薬物中毒者を「快樂にふけて自己管理ができない者」と見なし、道徳的墮落という観点からアヘン中毒をとらえていた。当時のイギリスでは、自助（セルフ・ヘルプ）と自由放任（レッセ・フェール）をよしとする風潮の中で、経済的困窮もアヘン中毒も自己責任であると考えられていたが、行き過ぎた自由放任は社会問題を生むという観点からアヘンの規制を求める運動が生まれたのである。

このほかに、医師の団体もアヘン使用に反対した。1858年に成立した

医師法により、正規の医師は国家登録され、以後医師の立場が著しく向上した。彼らは医師会を結成し、薬物の自由な流通がもたらす害について雑誌等を通じて啓蒙し、アヘンの常用に反対した。

こうした運動が実を結び、1868年に薬事法（Pharmacy Act）が成立した。イギリスでアヘンが初めて規制の対象となったのである。『ドルード』が書かれたのは1870年であるが、この物語の舞台が1858年以前であることを考えると、ジャスパーがアヘンを使用していても不思議ではなく、違法でもないのである。（1858年以前という年代は、ロチェスターと考えられるクロイスタラムとロンドンの間はまだ鉄道が敷かれていなかったという設定から判断することができる。）<sup>4</sup>

この薬事法によってアヘンは規制の対象にはなったが、売買が禁止されたわけではなかった。薬事法の要点は2点ある。第1は、薬屋の国家登録を定め、毒物の販売権を、登録した薬屋と正規の医師に限定した点である。この規定により、アヘンをはじめとする毒物は、食料雑貨店、靴屋、仕立屋、金物屋、パン屋などの店頭から姿を消すことになった。第2の要点は、アヘンや砒素など15種の毒物を規制対象に指定し、それらの販売規定を細かく定めたことである。こうしてこれらの毒物を入れる箱、びん、包装紙などには、その商品名とともにそれが毒（poison）であることを明記し、販売人の住所氏名を必ず記さねばならなくなった。さらにこの15種の毒物は第1種と第2種に分けられ、第1種に分類された毒物についてはさらに厳重な規制が加えられた。その規制とは、販売した年月日、購入者の住所氏名、販売量、使用目的等を専用帳簿に記録した上で、購入者の署名をとることであり、それに違反すると20ポンド以下の罰金に処せられた。

ただしアヘンは規制の緩やかな第2種に分類された。これは薬屋がアヘンの厳重な規制に反対したからである。その理由は、薬屋にとってアヘン

の売り上げが収入の大きな部分を占めていたからである。そもそも彼らはアヘンの常用を必ずしも有害だとは考えていなかった。労働者階級には乳幼児が泣くのを黙らせるために、アヘン入りシロップを与える習慣さえあったのである。<sup>5</sup> こうしてアヘンは、その販売が薬屋の店頭と医師に限られただけで、薬事法成立以降も自由に流通することになった。

1908年には薬事法が改正され、それまで第2種に分類されていたアヘンが第1種に移され、厳格な規制を受けることになった。しかし第1種になったとはいえ、イギリス人は成人であれば近所のなじみの薬屋から好きなだけアヘンを購入することができた。つまり1908年の時点においてもイギリス人はアヘンを家庭薬として自由に所持することができたのである。

イギリスでアヘンが禁止薬物になるにはさらに時間がかかる。第1次世界大戦開戦後の1916年、軍隊にコカインが持ち込まれたことから、医師の処方箋なしにコカインその他の麻薬を軍隊内に持ち込むことが禁止され、その禁止令が広く社会全体に拡大された。その結果一般市民はアヘンとコカインを医師の処方箋なしに買うことができなくなり、通常は所持することができなくなった。

大戦後の1920年には危険薬物法 (Dangerous Drugs Act) が成立し、これによってイギリス国民は、アヘン、コカイン、モルヒネ、ヘロインの所持と譲渡をいっさい禁じられた。ここで初めてイギリスにおいて一般市民のアヘンの所持が全面的に違法になったのである。<sup>6</sup>

ディケンズがジャスパーの人物を造形するにあたって「アヘン中毒」という要素を入れたのは、友人ウィルキー・コリンズの書いた『月長石』 (*The Moonstone*, 1868) の影響が当然あるだろう。『月長石』ではアヘン中毒の男が物語中の重要人物となっているが、この作品はディケンズが編集した週刊誌『一年中 (*All the Year Round*)』に掲載されたものであるから

ディケンズは熟読したであろうし、またコリンズ自身がアヘン中毒であったということも関係して、ディケンズは作品中にアヘン中毒を取り込んだのであろう。

ディケンズ自身はアヘンを常用していたわけではなかった。非常に疲労したときに、アヘンチンキを服用した程度である。ディケンズは2度目のアメリカ訪問（1867～68）の際、自作朗読の会を各地で開催した。その朗読が大変に体に負担になり、彼はすっかり体調を崩してしまった。食事は何もとることができず、睡眠薬代わりにアヘンチンキを服用した。彼は「これだけはよくきく」と語っている。<sup>7</sup>

ジャスパーのアヘン中毒は、前に引用したように、初めは鎮痛剤として用いていたのであろうが、彼はそれに依存する状態になっている。当時のイギリスの倫理観からするとそれは道徳的墮落と意志薄弱を意味する。ド・クインシーの『告白』も基本的にはその点に関する告白（あるいは弁明）である。しかし『告白』が発表されたとき、それに対する一般の反応は冷静なものであった。<sup>8</sup> アヘンの使用が違法であるならともかく、合法であり、しかも中毒症状が他人に危害を及ぼすようなものではないため、当人が思うほど一般から非難されるものではなかったのだ。

当時のイギリス文人でアヘン常用者であったのは、コリンズとド・クインシー以外に、コールリッジ、バイロン、シェリー、キーツらがいる。中でもコールリッジのアヘン中毒はよく知られている。しかしコールリッジは自分のアヘン中毒を隠そうとしていた。彼は書簡の中でこう書いている。「いつ如何なる時でも、私は人にへつらうこの毒物を刺激剤として、言い換えれば快楽の感覚を求めて、用いたことはなかった。そんなものは私には必要なかった。」<sup>9</sup> これに対して『告白』の翻訳者野島秀勝氏は「端的に言って、コールリッジは嘘をついている」と断言し、アヘンの力を借りなければ、「クブラ・カーン」等の名詩は生まれなかつただろうと述べ

ている。野島氏は、コールリッジと親しかったド・クインシーの言葉を引用している。「コールリッジはリュウマチの苦痛に襲われて阿片をはじめた。それからどうなったか？ 彼が遂には官能に溺れなかったという証拠は、どこにもない。」<sup>10</sup> ド・クインシーが素直に自分のアヘン中毒を告白しているのにコールリッジは正直でない、と野島氏は言っているのだ。

ただ、コールリッジが快樂のためにアヘンを用いたかどうかは、コールリッジ本人にとっては重要なことであつたかもしれないが、一般の人間にとってはあまり問題になることではない。どちらであってもコールリッジという人物に対する評価はそう変わらないだろう。アヘンは合法だからである。同様に『ドルード』のジャスパーについても、彼がアヘンを常用しているという事実だけでは、彼の人物造形にはそれほど大きな影響を及ぼすことはない。

結局『ドルード』で問題なのは、ジャスパーがロンドンのアヘン窟でアヘンを吸っていることなのである。この小論の冒頭に引用した『ドルード』の一節にはアヘン窟の退廃的で一種異様な雰囲気描写されているが、それがそのままジャスパーという人物に投影されている。

ロンドンのアヘン窟は、当時イーストエンドに実在していた。ディケンズは『ドルード』の執筆直前の1869年に、友人フィールズ氏とロンドンのアヘン窟を訪れている。『ディケンズ伝』の作者フォースターは次のように述べている。

彼（ディケンズ）はフィールズ氏を、自分の住居のあるケント州ばかりでなく、ロンドンの興味ある場所の幾つかにも案内することができた。彼を連れてロンドン郵便本局を訪れ、安い劇場や粗末な下宿街に案内し、夜は最も悪名高い盗賊窟の辺りを探訪した。（中略）そして、その（『ドルード』の）第1章の場面の原型となった阿片窟が、

二人の訪れた最後の場所であった。フィールズ氏は次のように書いている。「夜、みすぼらしい路地で、やつれた老婆が古いインク瓶で作った一種のパイプを吸っているのを見た。ディケンズが、『エドウィン・ドルード』で哀れな人物に言わせている言葉を、この老婆がつぶやくのを、我々は、彼女の横たわっているぼろぼろのベッドによりかかって聞いた」（カッコ内は筆者）<sup>11</sup>

ディケンズ自身によるアヘン窟の描写でないので、彼の目にこの場所がどう映ったかは明確でないが、少なくとも彼は実際に見聞したのものをもとに『ドルード』を書いたことがわかる。

ディケンズが『ドルード』を執筆したのは1870年で、アヘン窟が人々の関心を引くようになってまだ間もないころである。時代的に言えば、ディケンズは比較的新しい社会現象を取材し、それを作品中にいち早く取り入れたのだと言える。そしてただそれだけではなく、彼は文学的虚構を交えてアヘン窟のイメージを作り上げ、後に続く作家に影響を与えたと言えるのではないか。つまりディケンズは、すでに世間で固まっていたアヘン窟に対するイメージを利用したのではなく、実際以上にアヘン窟を恐ろしげな場所に描き、アヘン吸煙者に対して墮落し、退廃的な人間だというイメージを与え、彼の作品を読んだ作家たちがさらにそのイメージを膨らませて自分の作品の中に取り入れていったと思われるのである。

ギュスターヴ・ドレは『ロンドン巡礼』(*London: A Pilgrimage*, 1872) の中でロンドンのアヘン窟の絵を描いた。ドレに同行したブランチャード・ジェロルドはこう書いている。

私たちは隣の家へ行って、『エドウィン・ドルード』の冒頭の場面のような部屋に案内された。(中略) 私たちが入っていても、女はほ

んやり夢でも見ているように、ちらとこちらを振り向いただけ。(中略) その顔には人間らしさはほとんど見られない。粗木のパイプを大きな灰色のカサカサになった唇でなめまわし、毒を吸い込んでいる。<sup>12</sup>

ドレの描いた絵を見ると、女はそれほど人間らしさを失っているようにも見えないが、ジェロルドの頭には『ドルード』があり、小説の描写を通して目の前の光景を眺めているようである。

コナン・ドイルはシャーロック・ホームズ中の一作『唇のねじれた男』(*The Man with the Twisted Lip*, 1891) の中でアヘン窟を描いている。

薄暗がりを通して、おかしい姿勢で横たわっている人たちの姿がぼんやりと見えてきた。背中をまるめた者、膝を曲げている者、頭をそらせて、あごを天井に向けている者、さまざまだ。そして、どんよりとした暗い目が、あちこちからこの新来の客に向けられた。黒い人影のみえるところには、小さな赤い火がまるく灯っていた。金属製の火皿のなかで燃えるアヘンの勢いにつれて、その火は明るくなったり暗くなったりしている。<sup>13</sup>

オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891) では、主人公ドリアンがアヘン窟を「忘却を買うことのできる場所、旧き罪悪感の記憶を新たな罪悪の狂気によって抹殺することのできる恐怖の魔窟」と呼んでいる。<sup>14</sup>

『ドルード』では、アヘンを吸ってもうろうとなっているジャスパーの意識の中に、トルコ人の盗賊であるとか三日月形の刀であるとか、異国的な要素も取り入れて、異様な雰囲気醸し出している。<sup>15</sup> もともと中国人の習慣がイギリスに定着してアヘン窟ができたわけであるから異国ムード

があつて当然であるし、それにマイナスのイメージを付けるということは、中国人に対する差別意識もあつたであろう。これらのイメージが積み重なって、ジャスパーの闇の部分形成されているのだ。

ジャスパーはアヘン窟の帰りがけに銀貨を数枚置いてくる。それが相場だとするとこういう場所でのアヘン吸煙がかなり高くつくことがわかる。一方別の場面では彼が自宅でアヘンを吸煙しているところが描かれている。<sup>16</sup> 痛み止めのためのアヘン剤使用ではなく、快楽のための吸煙である。自宅でできるのであれば、なぜわざわざ高い代金を払ってアヘン窟まで出かけるのだろうか。アヘン窟の女とジャスパーとのこんな会話がある。久しぶりに来たジャスパーに女が話しかける。

「これまでこんな長い間、自分で薬を混ぜようとしてたんだろ？」

「時々自分勝手のみ方でやってたんだ」

「勝手なみ方はやめなさいよ。商売のためにも悪いし、あんたのためにも悪いよ。あたしのインク壺はどこいった。指貫は。小さな匙は。今日はちゃんとうまいのみ方でやれるからね！」<sup>17</sup>

アヘンの調合の仕方にはコツがあるようだ。当時ロンドンのアヘン窟で試しに吸煙をした人物が、アヘンの調合の仕方に感心したという記録も残っている。<sup>18</sup>

もともと中国では、明の時代長いパイプを使って吸うためには準備の手間も費用もかかるため、アヘン吸煙は有産階級がくつろぐためにおこなつたものであつた。ジャスパーは費用と時間を節約するために自宅でアヘンを調合したがうまくいかず、またロンドンのアヘン窟に姿を現したのである。

文学作品の中でアヘン窟が描かれてそのイメージが定着してくると、

人々はアヘン窟を野放しにしておくことに不安を感じ、アヘン窟の存在に対する反対運動が起こってきた。アヘン吸煙の悪習が白人中流階級にまで及ぶのを恐れたのである。しかし1884年の実地調査の結果、イーストエンドにはわずか5、6軒のアヘン窟があるだけであることがわかり、警察の調査でも「アヘン吸煙は中国人の国民的習慣であり、その習慣は減少しつつある」ということがわかった。アヘン吸煙に対して悪いイメージを持ってイーストエンドのアヘン窟に乗り込んだある雑誌記者は、「いやなところではなく、静かで安らかなところだった」と報告している。<sup>19</sup> 実際に現場に行った人たちの感想は、アヘン窟とは一般に信じられているステレオタイプ的なものとは異なり、小ぎれいなところであるというものだったのである。報告した人の中には、「自国民のアルコール消費に対してはチェックが甘いのに、単に外国人の習慣だからという理由でアヘン吸煙を非難するのは偽善だ」と述べる人もいた。<sup>20</sup>

このように見てくると、アヘン窟を作品中にもっとも早く取り入れた作家の一人であるディケンズの影響力の大きさがうかがえる。ディケンズは作品中にアヘン窟を用いる際、自己の想像力によってその実像を醜悪な方向にふくらませて文学的効果を高め、主人公の人物造形を深めた。そしてそのディケンズによるアヘン窟の描写が他の作家たちにも影響を与え、彼らのさまざまな作品に使われた。それらの作品中で新たに多くの表現がなされ、それがいっそう多くの読者に読まれることにより、19世紀末から世紀転換期にかけてのイギリスにおける「悪と恐怖のアヘン窟」のイメージが固まっていった。およそそのような流れを見ることができるだろう。

ディケンズによるアヘン窟の描写のオリジナリティと後の時代への影響力を論じるにはさらに詳細な検証が必要である。しかしディケンズが『ドルード』の中で切り取って見せてくれたアヘン窟の姿は、アヘン中毒者としてのジャスパーと不可分のリアリティを備えていて、どこまでが虚構な

のかという分析を超える力を持っていることは確かであろう。

(2011年10月)

## 注

- 1 Charles Dickens, *The Mystery of Edwin Drood* (1870; Oxford: Oxford UP, The Oxford Illustrated Dickens 1956), 2-3; ch.1. 以下、*Drood*と略記する。テキストからの引用はこの版による。なお、日本語訳は小池滋氏の訳(創元推理文庫, 1988年)を使用させていただいた。
- 2 *Drood*, 13; ch.2.
- 3 Thomas De Quincy, *Confessions of an English Opium-Eater* (1822; London: Penguin Classics 2003), 5-6. 日本語訳は、野島秀勝氏の訳(岩波文庫, 2007年)を使用させていただいた。
- 4 小池滋訳『エドウィン・ドルードの謎』(創元推理文庫, 1988年)95頁、訳者による傍注参照。
- 5 労働者階級ではないが、ジェーン・オースティンも母親から寝つきをよくするためにアヘンを飲まされていた。Virginia Berridge, *Opium and the People* (1981; London: Free Association Books, rev 1999) 60.
- 6 イギリスにおけるアヘンの受容と規制の歴史については、上記 Berridge による *Opium and the People* のほか、村岡健次「イギリス・アヘン小史」松村他編『英国文化の世紀4 民衆の文化史』(研究社, 1996年)、後藤春美『アヘンとイギリス帝国』(山川出版社, 2005年)を参考にさせていただいた。
- 7 John Forster, *The Life of Charles Dickens* (London: Chapman and Hall, 1874), vol.3, 402.
- 8 Berridge, 53.
- 9 野島秀勝訳『阿片常用者の告白』(岩波文庫, 2007年)解説233頁。
- 10 同上、解説234頁。
- 11 Forster, vol.3, 487-8. 日本語訳は宮崎孝一氏監訳による訳(研友社, 1987年)を使用させていただいた。
- 12 Gustave Doré and Blanchard Jerrold, *London: A Pilgrimage* (1872). 小池滋編著『ヴィクトリア朝時代のロンドン』(社会思想社, 1994年)158頁。日本語

訳は小池滋氏の訳を使用させていただいた。

- 13 Conan Doyle, *The Man with the Twisted Lip* (1891). 日暮雅通訳「唇のねじれた男」『シャーロック・ホームズの冒険』（光文社文庫, 2006年）227頁。
- 14 Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray* (1891). 福田恆存訳『ドリアン・グレイの肖像』（新潮文庫, 1962年）349頁。
- 15 *Drood*, 1, ch.1.
- 16 *Drood*, 48, ch.5.
- 17 *Drood*, 264-5, ch.23.
- 18 Berridge, 196.
- 19 Berridge, 201.
- 20 Berridge, 201.